

令和6年度インクルーシブな学校運営モデル事業 取組概要

【京都府】

目的・目標

【目的】

- ・継続的・計画的な交流及び共同学習の内容を連携校双方の教育課程に位置付け、柔軟かつ多様な授業や教育課程を実現する。
- ・児童生徒の副籍制度の運用や教員の併任発令により、支援を必要とする児童生徒の教育的ニーズに応じた継続的・計画的な交流及び共同学習の実現と、小・中学校における特別支援教育の体制強化を図る。
- ・設置者を越えた教員の研修、研究体系を連携校間で構築し、研究成果を市内へ波及するとともに、インクルーシブな学校運営のモデル事例として府内へ波及させる。

【達成を目指す目標】

- ・特別支援学校と小・中学校が有機的につながり一体的に運営されるための教育課程の整備と新たな取組について実践的に研究する。
- ・小・中学校に「学び支援室（仮）」を設置し、特別支援学校のノウハウを発信したり、協働により、できる限り共に学ぶための校内体制を整備・推進する。
- ・校種を越えた授業研究会を実施する。

学校運営連携校

京都府立舞鶴支援学校（対象：知的障害・肢体不自由）
 京都府立聾学校舞鶴分校（対象：聴覚障害）
 舞鶴市立池内小学校、舞鶴市立中筋小学校
 舞鶴市立高野小学校、舞鶴市立城南中学校

隣接型

カリキュラム・マネージャー

元特別支援学校副校長、
現特別支援学校教諭（再任用）

取組概要

- ・1年目の研究テーマを「知り合う」とし、各校の今年度の教育課程内で可能な取組から実施した。日常的な交流を通して、相互の様子を知り合うことを大切にカリキュラム・マネージャーが中心となり、調整を進め、年間約40回の交流及び共同学習を実施することができた。
- ・連携協議会とは別に、事務局会議（実施状況把握及び発展的な交流及び共同学習の実現に向けた体制整備への方針決定を行う）と運営会議（交流及び共同学習の取組検討などを行う）を組織し、年間12回集合型で情報共有や意見交換など行い、お互いを知り合う機会とした。
- ・Teamsを活用し、各会議の情報、交流及び共同学習の取組状況、インクルーシブ教育に関わる先進的な情報、先進校視察に関わる情報などの共有を進めた。Teams使用アカウントを府立学校と市立学校で揃え、設置主体が異なってもチームを組んで情報のやり取りができるように環境整備を進めることができた。
- ・教員も知り合う1年とし、既存の研究会（舞鶴支援学校校内研、城南中学校区ブロック研など）への相互参加を計画・実施することができた。また、各校で実施する公開授業への参観も実施し、学級経営や教科指導、障害や発達の状態を踏まえた授業づくりなど、校種ごとの強みを活かして「子どもも大人も学び合う」仕組みづくりができた。
- ・先進校視察（11視察先31名が参加）を実施し、共に学ぶための工夫や体制整備の取組（副籍や同一敷地内での交流及び共同学習）について学び、京都府で目指す姿を確認する機会となった。
- ・府内の特別支援学校、舞鶴市内の小・中学校教員を対象に1年次の事業報告会を開催した。これまでの取組を通して感じた生の声を伝えることを目的にパネルディスカッションを開催し、本事業の取組について広く発信する機会とすることができた。



連携協議会



先進校視察



事業報告会（パネルディスカッション）

①交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

【交流及び共同学習の発展の方向性】

障害のある・なし、支援する・される関係で終わらない様々な人との多様なつながりの中で、子どもが本気で学習に向き合う経験を共にすることを目指し、「ふるさと舞鶴市を題材にした共通テーマ等での学習」「従前から取り組んできた行事交流や文化・スポーツ交流の拡充」「通常学級における教科学習とのつながり」の3点から日常的な交流及び共同学習を進めた。

（特徴的な取組）

①「サツマイモ交流」（池内小学校、中筋小学校、高野小学校、舞鶴支援学校）

苗植え、芋の収穫体験をきっかけに、体験だけで終わらず、その後も継続して交流していこうという小学校教諭の声から収穫したサツマイモをどう使ったかのテーマ発表会や、3学期には各校の頑張り発表会など年間を通じた交流及び共同学習につながった。

②和太鼓交流（高野小学校、聾学校舞鶴分校）

両校の53年間に及ぶ交流の歴史の中で、支援学校の児童が小学校へ行く交流に加え、初めて支援学校に小学校児童が行く交流を実施。聾学校の児童の頑張り気づく小学校児童の姿や自分自身の気持ちの成長に気づく聾学校の姿など、エピソードを多数記録し、連携協議会等でメンバー間で共有する機会につながった

③支援学校中学部準ずる教育課程の生徒の国語科における共同学習（城南中学校、舞鶴支援学校）

週3回の国語の学習（中学校での授業、リモートでの授業、支援学校での授業）を進めるため、授業進度を合わせたり単元配列を調整したりの連携をTeamsを活用して取り組んだ。共に気持ちよく生活するにはどうしたらいいかという自分事として捉える姿が見られた。

→先生方から様々なアイデアが提案され、約40回の交流及び共同学習につながった。サツマイモ交流からオンライン交流へとつながり「こんなこともできる」といった実感を教師自身が持つことができたこと、児童生徒の姿やエピソード記録から「当たり前の景色であることの大切さ」「無理なくできることからやってみよう」ということを連携校の教員で確認することができ、交流及び共同学習の発展の方向性を同じにして、進めようとするまとまりが生まれた。



②現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

【教員研修の充実】

・教員も「知り合う」をテーマに、「公開授業の参観等、相互の学校を知る」「既存の研究会への相互参加」の取組を実施

（主な取組）

- ・城南中学校区ブロック全校研修会（中学校授業公開、後野文雄氏講演）
- ・舞鶴支援学校全校研修会（菊地一文氏講演）
- ・池内小・高野小の合同研修会（支援学校の教育課程理解、作業学習体験）
- ・中筋小学校の理解学習・職員研修（聞こえの理解学習）

城南中学校の理解教育・職員研修（交流及び共同学習を進めるために）など

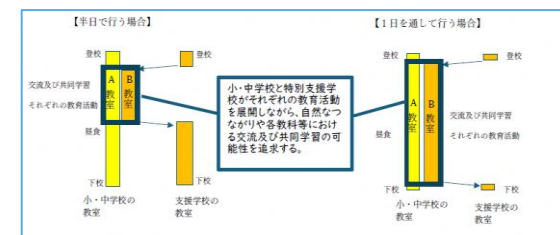
【指導体制の構築に向けて】

副籍制度、併任発令について、今年度内に運用方法や効果の分析、提案までには至らなかった。

3学期には小・中学校の空き教室等を活動場所とし、支援学校の児童生徒が自校の教育課程に沿った学びを実施した。

また、自立活動の指導を軸とした小学校と支援学校の連携による指導の充実を図る場として、2年次当初から小学校

1校に「学び支援室（仮）」を設置する方向で、関係校と教育委員会とで連携しながら準備を進めることができた。



本事業の 成果

・「知り合う」の達成を目指し、積極的に交流及び共同学習（年間約40回）や教員研修（年間18回）を実施し、同じ地域にある学校として意識した取組を進めることができた。こうした年間を通じた取組や先進校視察などを通して、お互いを理解し尊重し学び合うことが当たり前の景色になることが大切であるとグループ討議など通じてメンバー間で共有を深めることができ、空き教室を利用した教育活動の展開や「学び支援室（仮）」設置に向けた動きにつながった。

・児童生徒同士のつながり合う仕掛けや児童生徒や教員の変容について見とることを大切にしようと会議の中で確認することができ、記録シートの活用を進めることができた。エピソード集約を進める中で、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒が本気の学びの中で課題解決をしようとする姿を共有することができ、共に学ぶことの大切さを再確認する機会につながった。

・舞鶴市の学校で勤務する教職員に対し、インクルーシブ教育に関するアンケートを10月に実施し、487名（回収率75%）から回答を得ることができた。また、アンケートプロジェクトチームを立ち上げ、質問項目の選定、結果分析、自由記述のキーワード分類等を行った。

（アンケート結果）「Q:あなたの学校でインクルーシブ教育が進んでいると感じるか」

→進んでいる・やや進んでいると回答したのは「連携校の小・中学校84%」「連携校以外の小・中学校58%」「支援学校76%」であった。連携校においては、本事業での取組を通じて教員の中でインクルーシブ教育が浸透していることが分かった。

・今年度の取組を舞鶴市内や府立特別支援学校に広く啓発することを目的に事業報告会を開催することができた。（会場参加163名、オンライン81名 参加）参加者から、「今年度の具体的な成果と課題を知ることができてよかった。」「知り合う、つながり合う、学び合う段階のステップアップがとても分かり、次年度へのつながりが理解できました。」といった感想を多数得ることができた。

問8 特に「インクルーシブ教育」が進んでいると感じた 要因となっている取組を選んでください。※最大2つ選択

城南中学校区

- ・1位: 交流及び共同学習
- ・2位: 障害のある子どもとない子どもが可能な限り同じ場所で共に学ぶ機会
- ・3位: 支援学校と小中学校の教職員の交流（研修等）

城南中学校区外

- ・1位: 交流及び共同学習
- ・2位: ……【省略】…可能な限り同じ場所で共に学ぶ機会
- ・3位: ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり

支援学校

- ・1位: 交流及び共同学習
- ・2位: 障害のある子どもとない子どもが可能な限り同じ場所で共に学ぶ機会
- ・3位: ……【省略】…教職員の交流（研修等）・ 合理的配慮の提供

課題と今 後の展望

・小・中学校と支援学校それぞれの教育課程上の位置付けへの理解を土台とした、単なる交流で終わらない各教科等で目指す資質能力を育む交流及び共同学習を展開する。

・地域課題の解決に向けた取組など、小・中学校と支援学校の児童生徒と一緒に協働解決する自分たち事にした学びを展開する。

・「学び支援室（仮）」を小学校1校に設置し、自立活動の指導を軸とした小学校と支援学校の連携による指導の充実を図る。

・空き教室を利用した教育活動を展開し、当たり前に共に過ごすための条件や、京都府における持続可能な居住地校交流の在り方の検討を進め、副籍制度導入の必要性について研究を進める。

・教職員アンケートにより経年の変化を見取るとともに、児童生徒へのアンケートも実施を検討する。

・設置主体が異なることによる連携のハードル（依頼、使用アカウントの違い、複数校との報連相など）を下げるための事務手続きの改善を進める。

・保護者や地域への発信を進める。

・事業終了後の他地域への波及を踏まえた取組を計画・実施する。